

合葉修一先生の御逝去を悼んで

本会名誉会員で元副会長の大阪大学名誉教授合葉修一先生は、去る2018年5月7日、94歳の生涯を閉じられた。先生は、発酵産業の黎明期にあつて、この発酵工学に化学工学を融合させて、「生物化学工学」という新たな学問分野を創出された偉大な先駆者である。HumphreyやMillisとともに執筆された『Biochemical Engineering』はあまりにも有名で、生物工学に携わる者にとってはバイブル的存在となっている。

微生物機能を利用する物質生産をあらゆる面から定量的に解析する学問は、不確定性や不均一性が想定される物質生産の安定化を実現し、さらには代謝を理解して制御技術を構築することに大いに役立っている。また当時としては最先端技術であった遺伝子工学も取り入れて生物化学工学を大きく飛躍させるなど、世界のバイオテクノロジー研究を牽引されてこられた。後進の教育や人材育成にも尽力されており、多くの教え子によって先生の影響は受け継がれ、生物化学工学は大いに発展を遂げている。学界の発展に多大な貢献をされた故人に、心から哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈りしたい。

(早稲田大学理工学術院 教授／日本生物工学会 会長 木野邦器)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。学部で初めて授業を受けた時、世界の最新の動向を知るためということで、11の英文誌（勿論Journal of Fermentation Technologyも含む）と英語の教科書3冊を真っ先に説明されたのを鮮明に覚えております。4年生時に配属された第六講座（醗酵工学単位操作およびプロセス設計）では兼任教授で、さらに退官されるまでの大学院前期課程の1年間ご指導を頂きました。ご指導頂いたりジン発酵のモデル化で、その年に初めての学会発表〔昭和61年醗酵工学会（日本生命中之島研修所）〕を無事に終えることができ、研究者としてのスタートが切れました。本当にありがとうございました。

(大阪大学大学院・工学研究科・生命先端工学専攻 教授 大政健史)

合葉修一先生が御逝去されました。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。合葉先生には、東京大学と大阪大学の大学院で5年間直接ご指導を賜りました。私が若気の至りでつい先を急ごうとすると、いつも先生は「もっと足元を見なさい。あせってはだめだ。」と諭してくださいました。妥協を許さない厳しさの中でも自由な発想で研究をさせようとした先生のご指導のお蔭で、私もなんとか研究者の道を歩むことができました。私にとり「合葉先生のお弟子さんですね」と言われることがいつも自慢であり誇りでした。先生がお酒を楽しまれる時に見せられた美しい笑顔が、今も目に浮かんでまいります。たくさんの教えを本当にありがとうございました。

(大阪大学 名誉教授 大竹久夫)

昭和41年、東大工学系大学院へ進学するにあたり、小生は、応用微生物学研究所（現 分子細胞学研究所）の合葉修一教授の門をたたいた。これからは、「生物科学の時代だ」と伯父から勧められたこともあったからである。合葉先生は、米国のハンフリー、豪州のミルス両教授と共著で、「生物化学工学」の教科書を世界で初めて出版された碩学でした。先生の御指導は、峻厳を極めた。今でも論文執筆の厳しさは、小生の脳裏に深く刻まれている。その一方、月に1度位、居酒屋で御馳走してくださる優しさを持っておられた。先生の御逝去にあたり満腔の謝意を表意するとともに、心からご冥福をお祈りする次第である。

(理化学研究所 名誉研究員 遠藤 勲)



ありし日の合葉修一先生 [大阪大学・最終講義 (1987年)]. (写真提供: 今中忠行先生)

合葉修一先生は生物化学工学の生みの親である。先生が著された『Biochemical Engineering』は日本語を含め8か国語に翻訳され、世界中の大学院生の教科書であった。私がMIT留学を終え大阪大学に戻った時に合葉研究室で助手として研究させて頂いたのが深いつながりの始まりであった。そこで個人的に思い出深いエピソードをいくつか披露したい。①最初に実験結果をまとめて報告した時、元の実験ノートを持ってくるように言われた。それを持参すると先生自ら数値をグラフ上にプロットし、「いいでしょう」との言葉があった。2回目も同様であったが、3回目以後はチェックがなくなった。②先生の部屋に入るには秘書を通してアポイントメントを取るのが常であったが、私に対しては「アポイントメントなしで入室しても構わない」と言われていた。③英語論文の下書きを準備して先生と議論することになるのだが、術語一つにしても原典を準備しておかなければならなかったのでいつも大量の論文コピーを持参していた。英語のチェックも厳しかったが、お陰で英語論文を書くコツを身に付けることができ、英語に対する抵抗感はなくなった。④合葉先生とは2人でよくお酒を飲んだが、家が近かったせいもあり私の家へ寄っていただくことも多かった。しかし軽く飲まれた後、「では失礼します」と席を立たれるので先生の家までお送りした。あとで家内が「合葉先生のお酒はきれいな飲み方だ」と感心していた。合葉先生に出会えたお陰で今の私があると思い、心から感謝申し上げます。先生のご冥福を祈念致します。

(京都大学名誉教授 今中忠行)